

〔書評〕

国立国語研究所報告 80

国立国語研究所

『言語行動における日独比較』

馬瀬良雄

はじめに

本書は言語行動研究という若くて新しい研究分野での輝かしい金字塔である。その価値は測り知れない。この書を一言で紹介するとすれば、次のように集約できよう。

本書は日本人とドイツ人(これに加えて在日外国人)の言語行動の比較対照を目的とした調査研究の成果であり、日本での言語行動研究の中で、最も大規模にして組織的・体系的に調査され、分析され、まとめられた、初めての大きな収穫である。

本書の構成は以下に示すとおりである。

- | | |
|-----------------|--------------|
| 1. 調査の意義・方法 | 2. 言語生活・言語意識 |
| 3. あいさつ行動 | 4. 買物・道聞き |
| 5. 身体の空間的な位置・距離 | 6. 反省と今後の課題 |

日本人用調査票 英文概要 参考文献 索引

以下、まず1.から5.までの各章の内容を、紙数の関係もあり、日独を中心に紹介し、6.では紹介とともに筆者の意見を述べ、最後に本書の価値、刊行の意義等について述べる。

1

1.1 第1章は、1.1言語行動様式の対照研究について、1.2 研究の発端、1.3 研究方法・実施の3節からなる。

1.2 第1節は言語行動とは何かの説明に始まる。著者はこれを次のように述べる。

「言語行動」はコトの概念であるから、極めて具体的な営みである。この具体的な場面において、ある言語形式、あるいは言語記号が選択され使用されて、それによって起こる伝達行動をいうと考えていい (p. 1)。

これをふまえたうえで「言語行動」を「言語運用」「言語行為」「言語活動」「言語生活」等と比較してその異同が述べられ、この研究はパロールの学に属するものと規定される。続いて言語行動の様式、言語行動と場面、異文化間の言語行動研究について説き進められる。論述は慎重で手堅い。せっかちな読者はある種の歯切れの悪さを感じるかもしれないが、私はこの中に、若い学問であるこの研究を初めから窮屈に規定してみずからをしぼるよりも、多少ゆるく規定して学問の進展の中でそのおさまるべき場所を求めるのがよいという著者の立場の表明を読みとる。「まず実践から出発するのがわれわれの基本姿勢である」(p.5)にもその態度が読みとれる。私もこの立場に賛成である。

1.3 異国間言語行動の比較研究を成功させるためには国際協力が必要だが、この研究調査には国立国語研究所に対するドイツ語研究所(西ドイツ)の大きな協力があった。

調査のあらましをかたんに紹介する。調査国は日本及び西ドイツ。調査方法は留置きアンケート調査。調査の対象は前者は日本人及び在日外国人、後者はドイツ人。調査票での使用言語は日本人は日本語、ドイツ人はドイツ語、在日外国人は英語である。在日外国人を対象としたのは、日本人の言語行動様式の特徴を知る手がかりを得、異文化社会生活者の異文化適応の様相の一端を探るためである。調査は1977年から5年に及ぶ。

調査担当者は、日本側は林大はじめ12名、西ドイツ側はG. シュティッケルはじめ9名。本書執筆者は野元菊雄、林大、江川清、高田誠、田中望、石井久雄、米田正人、志部昭平、日向茂男、杉戸清樹の各氏(以上本書執筆順)である。

ドイツ人調査では、マンハイムを中

心にハイデルベルク、ボン、ケルンの各都市で、市役所職員、一般市民、学生の調査が行われた。日本人調査では関東・中部・関西の各地区で、八王子・名古屋・奈良各市役所職員、学生などの調査が行われた。在日外国人では大使館・学校関係者などを対象に調査が行われ、英語話者が主なる分析の対象とされた。今、被調査者を日本人・ドイツ人・在日外国人別、社会人・学生別、男女別に分けて示すと表1のとおりである。

表 1

		男	女	全体
社会人	日本人	449(87.9)	62(12.1)	511
	ドイツ人	107(49.1)	111(50.9)	218
	在日外国人	120(58.5)	85(41.5)	205
学生	日本人	284(48.4)	303(51.6)	587
	ドイツ人	45(42.9)	60(57.1)	105
	在日外国人	83(46.4)	96(53.6)	179

2

2.1 第2章では言語生活と言語意識が扱われる。第1節言語生活ではマスメディア接触とパーソナルメディア接触について分析され、ほぼ次のような結論が述べられている。

日本人はテレビ、新聞等マスメディアへの受動的コミュニケーションの量は著しく多い。だが、手紙、電話、近所の人、見知らぬ人とおしゃべり等対人的な働きかけを中心とする能動的コミュニケーションの量は少なく、日本人の言語生活の特徴は受動的である。これに対し、ドイツ人や在日外国人は能動的である(p.44)。

ほぼ予想された結論だが、資料によって裏づけられているので、極めて説得力がある。

2.2 本章で第2節以下の中から二つ、三つについて紹介しよう。

「外国語」ということばで何語を思い浮かべるか。日独とも1位は「英語」、2位は「フランス語」である。ただし、日本では「フランス語」に迫るのが「ドイツ語」で、前者は女学生・若者好み、後者は熟年・男子学生好みであるというのも、なるほどと思わせる。

ドイツでは「標準ドイツ語を話すか」の間に、社会人の1/3以上、学生の1/4近くが、「話さない」と回答する。質問に若干の曖昧さを含むが、日本人に「標準日本語を話すか」と問えば、「話さない」の回答は確実にもっと少ないであろう。また、同じくドイツで「ドイツ語はどの専門分野で重要だと思うか」を尋ねた。「哲学・文芸」を筆頭に「工業・技術」

「政治・経済」と続くが、「医学」は「その他」以外では最も低い。日本人を対象に同じ質問をすれば、おそらく「医学」が上位を占めると思うがどうであろうか。

2.2: 日本人の習慣的行動を①音をたててソバをすする、②話すとき視線を避ける、③イエス、ノーを直接言わない、の3点につき調べた。今、否定的回答率でみると、①の意思伝達を特に目的としない非言語的行動から、②を経て、③の意思伝達機能を有する言語行動に向かい、数値は上昇する。当然だと言う人もあろうがおもしろい。

2.2: 「日本人の性格」が20の性格特徴語につき調査された。在日外国人(社会人)の60%以上が認めた特徴語は「勤勉な、礼儀正しい、親切な、自尊心のある、正直な、恥ずかしがりや、防衛的な」の7語で、従来日本人の性格として言われて来たものとほぼ一致する。衝撃的なのは中国語話者(留学生)の結果とかなり異なる点である。例えば、「正直な」への肯定の回答は、在日外国人(英語話者)70%台に対し、中国語話者では40%台となる。また、「打算的な」の肯定の回答は、在日外国人10%台に対し、中国語話者では50%を超える。「恥ずかしがりや」に至っては、否定回答は前者の7%が後者で60%を超える。両者とも自国民の性格の特徴をふまえて日本人の性格を評価しているのだから、この相違は当然だとかんたんには片づけられない。日本人が両者に異なる振舞いをしているために、この差となったことが十分考えられるからである。

3

3.1 あいさつ行動は「家庭で」「道で」「公園で」「学校で」の4部からなる。

「家庭でのあいさつ」はあいさつの有無、ことば、随伴行動につき、次の8項を調べている。

- ①夕食を食べるとき ②夕食を食べ終わったとき ③朝、起きたとき
- ④夜、寝るとき ⑤外出するとき ⑥帰宅したとき
- ⑦家族が外出するとき ⑧家族が帰宅したとき

これらのあいさつ行動は、日常生活で意志伝達を第1とはせず、潤滑油的役割を果たすもので、多分に様式化していると予想されるものである。日本の家庭でのあいさつはことばの一樣性が極めて高い点に特徴がある。これはドイツ人のあいさつことばの様式と比べても特徴的であるし、また、日本人の身振りの様式と比べてもやはり特徴的だという。

3.2 「道でのあいさつ」として次の5項目が調査された。

- ①朝、近所の親しい人と会ったとき ②昼、近所の親しい人と会ったとき
- ③夕方、近所の親しい人と会ったとき ④その日が誕生日の同性の知人に会ったとき
- ⑤家族に不幸があった知人に会ったとき

①～③の「平生のあいさつ」では日本人もドイツ人も簡単な一樣性のあるあいさつことばを有し、保有率も高い。だが、随伴行動は異なり、日本人はあまり立止まらず軽くおじぎなどするのに対し、ドイツ人はよく立止まり、握手することもある。

誕生日のあいさつは日本人では一般化していない。特に社会人男性で著しい。身振りも一様化していない。ドイツ人があいさつして身振りも握手で様式化しているのと異なる。

誕生日のあいさつは、日本では若い人、特に女性から広がりつつある新しい習慣らしい。

不幸に対するあいさつは、日本人は主に社会人が行き、学生、特に男子は少ない。ことばも一様性を欠く。身振りはおじぎが多いが、捉えがたいところもある。ドイツ人が握手して‘Beileid’類を言う一応の様式を持つのと異なる。著者は誕生日・不幸に対する日本人のあいさつは、一様性が様式の完成であるのならば、様式として未完成なのではなかろうかと言う (p.130)。私は、それは「誕生日」では正しいが、「不幸」では様式化していたものが崩れ始め、学生、特に男子でそれを学べずにいる状態を示すものではないかと思う。

3.3 「公園で」のあいさつ行動をみよう。日曜の朝、公園の散歩で近所の同年輩の親しい人(独では男性 Herr Müller に特定)に出会う場面を想定し、あいさつ、話題、目線の位置等の質問が行われている。分析の細部は本書に譲り、気付いた点を述べる。

会話の話題は「天気」が多く、これは「健康」とともに年齢の高い方に好まれ、「スポーツ」が男性に多いなどは、日独に共通だが、「政治・時事問題」がドイツ人には若干現れているのに対し、日本人にあってはほとんどなく、政治的無関心を露呈している。選択肢にもう少し工夫があれば、さらにおもしろい結果が期待できたのではないかと思う。

目線の位置は日独とも「相手の目を見る」が最も多く、かつ、日は独を上回る。「日本人は話すとき相手の視線を避ける」との従来の見方をどう解釈したらよいか。これに関する問題は「道聞き」でも現れる (p.302)。もしも第6章で述べているような個別面接法が行われるならば、調査者自身による被調査者の目線の位置の確認が可能となろう。

「出会い」「別れ」のあいさつ行動には年齢・性差がある。まず、日本人の「出会い」では、オハヨウゴザイマスはオハヨウよりも高い年齢層が好み、ヤアやオスは男性、特に学生に多い。身振りでは「おじぎ」「会釈」が年齢が進むにつれ多くなり、「手をあげる」「手を振る」は若者に多く、前者は男子学生、後者は女子学生に多い。「別れ」のあいさつでも、バイバイは学生、特に女子に多く、身振りも「出会い」に準じた差が認められる。ドイツ人で、「出会い」のことばに‘Guten Morgen!’等が最も多いのは日本人でオハヨウ(ゴザイマス)の多いのと平行する。若い層で、特に女性で‘Hallo!’が多い。これは日本人の「別れ」のことば、バイバイと語種、年代、性で一致していて興味深かった。

3.4 あいさつ行動の最後は「学校でのあいさつ」である。高校や中学(独は最終の学校時代)での行動を思い出して、次の5項につき、記入してもらっている。

- ①朝、校門に入ろうとするとき ②学校の廊下ですれちがうとき
③授業が始まる時 ④授業が終わったとき
⑤授業中、先生から出された問題に答えようとするとき

ここでの質問文は、他でも若干認められるが、日本語版とドイツ語版とでは若干の相違が認められ、このことが残念なことに日独の細かな比較分析をさまたげている。

各場面の動作・身振りは年齢差がかなり大きく、特にそれは生徒に著しい。そして日独ともに、一様に単純化、非丁寧化へ向かっているのは興味深い。例えば、校門での生徒の動作は「立ち止まる」から「立ち止まらない」へと推移するなど。

あいさつことばでは、ドイツ人では①～⑤の全場面ですべての定型表現の使用が一般的なのに

対し、日本人では①のみ定型的表現オハヨウ(ゴザイマス)が用いられ、他の場面では定型性は低く、日独の大きな違いとなっている。

4

4.1 第4章は「買物・道聞き」で、「駅の売店で」「万年筆買い」「道聞き」からなる。買物行動の代表としてこの2場面が選択されたことに多少疑問が残らないではない。

「駅の売店で」では、①客は駅の売店で買うとき、②客は金を払うとき、③店員は金を受取り、つりを渡すとき、④客は買物がすんで売店を離れるとき、どうするか尋ねている。

物を買いたいとき、日本人は多く自分で取って店員に渡すが、ドイツ人は店員に欲しい物を告げ、取ってもらう。金を払うとき、日本人は多く黙って金だけを出すのに対し、ドイツでは必ずしもそうではない。日本では黙って金を出すと店員も黙って受け取るのに対し、ドイツでは黙って金を出しても、店員はなんらかのことばを発する。売店を離れるとき、日本人はドイツ人に比べ「ありがとう」の類を言わない率が極めて高い^{注1}。

4.2 本書では「万年筆買い」に95頁がさかれ、分析は極めて周到で丁寧である。

陳列ケースに近づいた客が、一人で品物を選ぶことの多い点は日独共通する。次に、客がケースに近づくと、日独とも店員は積極的に話しかけて来る。店員が話しかけて来ると、日独とも多くは積極的に話す。接触を断る場合、感謝表現を冒頭に、文末まではっきり言うドイツ人と、感謝表現もなく口ごもりがち日本人とのあいだに対照が見られる。

インクの入れ方・使い方を8割が聞く日本と、聞く・聞かないが半々のドイツでは差が見られる。試し書きは日独とも8割ができると答える。だが、試せないときこれを要求するのは日本3割、ドイツ6割で明瞭な差がある。品物を指すとき、人指し指だけで指すのが客、手のひらを広げ上を向けて示すのが店員という結びつきは日独共通である。

買いたい万年筆が決まると、日本では命令・要求表現(例、～ヲ下サイ)が多く、ドイツでは1人称希望表現(例、Den nehme ich.)が多い^{注2}。客は品物を受取るとき、日独とも定型的な感謝表現が多いが、黙って受け取るのは日本人に多く、ドイツ人では‘Auf Wiedersehen!’を添える場合がある。身振りでは「おじぎ」の日本と「ほほえみ」のドイツという違いがある。この点は品物を渡すときの店員の身振りでも同じで、日本ではアリガトウ類が、ドイツではオ待タセシマシタ類が多い。日独の支払い方法の違いがこれには反映している。

4.3 本章の最後は「道聞き」である。日本では若年層は「通行人」、中壮年層は「店の人」に尋ねることが多く、「警官」は1割未満である。ドイツでは圧倒的に「通行人」が多い。次に通行人に道を尋ねることばは、日本人はスミマセン類、ドイツ人も日本語のスミマセンにあたる‘Entschuldigen Sie!’が最も多い。教えてもらったお礼のことばは、日本ではアリガトウゴザイマシタ、ドイツでは‘Vielen Dank!’が最も多く、ともに選択肢の中では丁寧な表現を用いる。

5

第5章は「身体の空間的な位置・距離」である。まず、性と親疎を組み合わせ、A:顔見

知りだがあまり親しくない同性の人, B: 同じ条件の異性の人, C: 最も親しい同性の人, D: 同じ条件の異性の人, を選んでもらう。次に, A~D に対し, ① 1人で道を歩いていて会ったときの身振りといきさつ, ② そのあと立話をするときの相手との距離, ③ 立話のあと並んで歩くときの相手との距離, について尋ねている。主な結果は次のとおり。

全体としてドイツの方が日本人より「近い」位置で行動する。その場合, 相手との親疎, 性の異同で対人距離を選択する。日本人女性でも同じ特徴が見られる。ただし, ドイツでは親しい異性には距離が近くなるのに対し, 日本女性では異性には親疎に関わらず距離が遠くなるのは, 興味深い。日本男性は親疎関係に重点をおく選択をするという。

6

6.1 第6章は「反省と今後の課題」で4頁から成る。ここでは本章の紹介と同時に, これに対する私の意見を交えながら, 本章のテーマに即して述べることにする。

本章では調査研究に対する反省が謙虚に述べられ, 将来への課題が建設的に説かれているのが印象的である。

6.2 初めに, 被調査者の選定をめぐり, それが機関ないし個人の伝手を求めて得られたことへの反省が述べられ, サンプル調査を行うべきであったとする。私はそれとともに, 被調査者, 特に社会人の属性, 調査地点についても若干の疑問を持つ。調査地点については, 日独の調査のそれぞれに数地点で行われた意味が, 言語行動の両国内の地域差を考えたうえで, これら地点の総和が日本及び西ドイツをほぼ代表するに足ると考えたのであれば, それはやや不十分であろうかと思う。特に西ドイツではその感が深い。そして日独の資料分析の中にも項目によって地域差が論じられてよいと思うものがあるが, それへの言及は極めて少ない。また, もし地域差のない, あるいはあっても比較的少ない項目を中心に選んだとするならば, 両国数地点ずつの被調査者を調査する必要はなかったとも言える。そして社会人調査では大・中都市の市役所職員が被調査者として選ばれているが, これをもって日独社会人の代表とすることにもやはり無理をとまうように思う。

また, 本章で触れているが, 性別・年齢別の比率の著しい片寄りも問題で, 今男女の比率をとると, 日本の社会人の場合, 男性 87.9%, 女性 12.1%であるのは, いかにもアンバランスにすぎよう。例えば, 公園での別れの身振りでの次のような説明がある (p. 137)。

社会人では「会釈する」が一番多く, 「手をあげる」が続いている。

ここで「手をあげる」の比率を見ると, 全体 24.3, 男 26.3, 女 9.7である。そして上の説明にはないが, 「手を振る」を見ると, 全体 13.1, 男 9.4, 女 40.3である。したがって全体を見ると, たしかに前者の比率は後者の2倍近いが, もしも男女が半々である場合には「手を振る」の比率は「手をあげる」よりも高い数値を示すこととなり, 上の説明文の「手をあげる」の場所には, 替って「手を振る」が登場する。だから, このような場合には我々は数値の読みとりには慎重であるがうえにも慎重でなければならないと思う。

被調査者などの選定にあたっては, サンプル調査も含めて, 真の意味で日独を代表するような選定の方法を摸索し, それによって調査を行ったならば, さらに興味深い種々

の結果が出たであろう。だが、これは言うはやさしいが、むずかしい問題を種々含んでいることも事実である。そしてまた、国際共同研究には相手国側がいかに協力的であっても大きな困難がつきまとうことも事実で、現実的処理を迫られることも多いのである。

6.3 次に、具体的場面での具体的表現を調査するためには、アンケート調査でなく個別面接法が望ましいとの反省が述べられている。たしかにこの場合、留置式アンケート調査よりも個別面接法の方が種々の点で優れているが、費用、両国で等質な調査を行うための調査員の訓練とその確保等を考えると、一概に後者がいいとも言い切れない問題であるとも思う。

6.4 さらに、日独英の調査票の形式上見られる幾つかの不統一についての反省が述べられ、互いの比較対照を図る項目で、①場面設定状況や質問文の微妙な違い、②回答形式の不一致(書き込み式と選択肢式、一肢選択式と多肢選択式など)、③選択肢の対応関係のずれ(呈示選択肢数、カテゴリー内容の非対応)などの散在があげられている。これはあとで述べる翻訳の問題とともに、国際調査のむずかしさを物語っている。

6.4₁ 上の①、②、③に属する問題は若干認められはする。私はこの調査票は全体としては大変よく作られており、この程度の問題は取り上げるほどでないとも思うが、今後、本書をふまえて新たな発展を望む人たちのために、以下、二、三の例をあげることにする。ただし、著者が問題が多いことをすでに認めている第3章の「学校でのあいさつ」以外のところから例をとろう。

6.4₂ 質問文や場面設定が異なる例として「道聞き」からとる。

(日本語版) 今度は逆に、あなたが道を歩いているとき、40歳くらいの男性に呼び止められたとします。/・何と言って返事をしますか。/1.何も言わない 2.「はい」 3.「なんでしょう」 4.「何ですか」 5.その他

(ドイツ語版) Umgekehrt denken Sie sich den Fall, daß Sie von einem ungefähr vierzigjährigen Mann angeredet werden: “Entschuldigen Sie,……”! (逆に40歳くらいの男性から「すみませんが…」と話しかけられた場合を考えて下さい)/・Mit welchen Worten antworten Sie ihm? (どんなことばで彼に答えますか) “Ja, gern!” (喜んで)/ Ich sage nichts und erkläre direkt den Weg. (何も言わずに直接道を教える) Sonstige (その他)

日本語版とドイツ語版とは場面が微妙に違い、それにもなって選択肢に違いが出ていることがわかる。

6.4₃ 「家庭でのあいさつ」の身振りの選択肢をみると、ドイツ語版9、日本語版13、英語版16とかなり異なる。選択肢にないものについては具体的に書くように指示されているが、任意の身振りが選択肢に含まれているか否かにより、その回答率が異なることは、容易に予想されるところである。例えば、「手を合わせる」は日独になく、英語版にのみ、‘put hands together as though praying’ としてある。これは、「夕食を始めるとき、終わったとき」の身振りとして、在日外国人ではいずれも‘slight nod of the head’に次ぐ高いパーセンテージを示している。だが、日独では一定の数値をとらなかつたらしく、「手を合

わせる」は表に現れて来ない。おそらくこれを選択肢に加えたならば、ドイツ人ではこれについて在日外国人並みの数値が現れる蓋然性も否定できないだろう。また、日本人でも「手を合わせる」は西日本出身者を中心に、かなりの高率で現れることが予想される。^{注3}

なお、このとき選択肢からの選択回答数が日本語版・英語版が三つ以内であるのに対し、ドイツ語版では特に制限がない。また、質問のしかたも微妙に異なるところがある。こんな点も結果を分析する際に微妙な影響の及ぶことを恐れるものである。

6.4. これに似た問題をもう一つだけあげる。「万年筆買い」で、これはと思う万年筆が見つかったとき、ペン先の太さ、インクの入れ方などを聞くかの質問に対し、日本語版では、「1. 得心のいくまで聞く。2. いちおう聞いておく。3. あとで説明書を読めばわかることだから聞かない」の回答が用意されているのに対し、ドイツ語版では「1. Ja, ich frage die Verkäuferin. (はい、女店員に聞く。) 2. Nein, ich frage nicht danach, weil es von selbst klar wird, wenn ich nachher die Gebrauchsanweisung lese. (いいえ、あとで使用説明書を読めばわかることだから、聞かない。)」となっていて、両者に若干の食い違いがある。本書では日本語版の1.と2.とを合計してドイツ語版の1.と比較しているが、微妙な問題を残していると言えよう。

6.4. 次元を異にする選択肢が、A 調査票ではそれらを分けて質問し、B 調査票では分けることなく同列に並べて質問している場合がある。具体例をあげる。

「道でのあいさつ」の中で、「立ち止まる」(独: Er (sie) bleibt stehen.), 「立ち止まらない」(独: Er (sie) bleibt nicht stehen.)をとる。日本語版ではこの二つをいわゆる「身振り」とは別に、「動作」として区別して二者択一のかたちで尋ねているのに対し、ドイツ語版では両者を区別することなく、これらは身振りを表わす選択肢とともに並べられている。その結果「立ち止まる」「立ち止まらない」の数値は当然日本の方がドイツより多くなるが、それをそのまま単純には比較できないマイナス面を生んでいる。

6.4. これらの問題はいずれも日本語版とドイツ語版の調査票の僅かなずれともいう程度の違いによって起こっている。日・独版に英語版を加えた3種の調査票を比較すると、質問文にしても、選択肢にしても、ドイツ語版よりも日本語版、日本語版よりも英語版というように、調査年次のあとの調査票の方が改良され、優れた調査票となっている。例えば「道でのあいさつ」の「立ち止まる」「立ち止まらない」を他の「身振り」から切り離し、「動作」として1項を立てるのもそれである。しかし、そのためにその個所を含む項目は厳密な意味では国際比較ができにくくなるという皮肉な結果をも招来している。一旦作った調査票を変更することには、よほど慎重でなければならない。しかし、私には調査者がそれに手を入れたくなる気持ち、わかりすぎるくらいわかる。

6.5 反省・課題として「翻訳」の問題が取り上げられている。翻訳はこの種の国際比較を行う場合には、避けて通ることのできない重要で深刻な問題をかかえている。本書では日本語の「ときどき」、ドイツ語の'manchmal', 英語の'once in a while'または'sometimes'を取り上げ、指す程度の範囲がどの程度重なるかわずかしい問題がそこにはあることを述べている。むずかしい問題である。

(38)〔書評〕『言語行動における日独比較』

日本語版の「新聞を駅の売店などで買うことがありますか」の選択肢の一つに「ときどき」のほかに「しょっちゅう」がある。ドイツ語版のこれにあたる部分は'sehr oft'であり、英語版では'always'となっている。これなども果たしてこれでよいかどうか。外国語との比較の前に、「ときどき」といい、「しょっちゅう」といい、この指す範囲をどう受け取るかについては、日本人のあいだでも個人による揺れがあるであろう。そうすると、この場合に即して言えば「1週間に～回」というように、具体的な数字を呈示するのも一つの方法であると思うが、いかがなものだろうか。

なお、この質問文の中の「駅の売店などで」の部分は、ドイツ語版では'am Kiosk u. a.', 英語版では'at the train station'となっていて、互いに少しずつ微妙に違う。ドイツ語 'Kiosk' は駅だけに限らず、街頭、公園などの売店についても言うことができるし、また、日本語版の「など」、ドイツ語版の'u.a.'にあたる部分を欠くなど。国際比較で調査票を2言語で作成する場合、A言語の原文からB言語への翻訳、その翻訳からA言語への再翻訳の手順を経て、原文と再翻訳された文との比較検討が必要だとされる。本研究の調査票作成の場合も、この手順は踏んだと思われるが、先にも触れたように、調査票の改良がこれからみ、この効果が十分に活かされていないのは残念である。

またさらに、新聞の宅配が行きわたっている日本と、そうでないドイツとでは、上の例で質問文はほぼ同じであり、意味の差は許容できる範囲内にあるとした場合も、新聞を求めるという方法のうえで両国のいわば文化的相違があるわけで、したがってその数値を単純に比較したのでは意味は少ないという問題が、さらに奥に控えている。この問題は次の6.5につながる。

6.5 反省・課題の中で、言語以外の情報を正確に掴むことが、かかる調査では必要であることを述べる。本書にあがっている諸例はそのとおりであるが、その中の「外国語」についてはこんな経験がある。サンパウロ大学で複数の学生に何か国語話せるかを尋ねたとき、その回答の中にスペイン語が入っていない。わけを聞いたら「スペイン語は外国語とは考えていない。そのくらいポルトガル語とよく似ている。だから私たちの大学の外国語入試課題にスペイン語は入っていない」という返事だった。同じように「外国人」についても、ドイツ語版調査票の'Ausländer in Deutschland'に対して、あるドイツ人は「多くのドイツ人はトルコからの外国人労働者を思い浮かべるだろう」と答えた。

6.6 また、本章の中で、ゼロの言語行動についても調べる必要があり、調査が日本人にとって「有徴」な言語行動に傾きやすい点を指摘し、日本では無徴だがドイツでは有徴な行動、また両者ともに無徴な行動を調べる必要を説き、ユニバーサルな設問を設けることを提唱している。そのとおりであって、それにより言語行動の世界的規模での調査研究が行われるようになれば、すばらしいことである。反省・課題の最後に、場面の分類整理とモデル化の必要性が取り上げられている。今後の課題として最も重要なものの一つである。

6.7 本書は10人の研究者により分担執筆されている。執筆者全員が国立国語研究所員(または元所員)であるので、各章・節の記述は比較的統一がとれており、読む者に異和感をあまり与えない。このことは本書のプラスの評価の一つとして数えるべきものである。し

かし、細部にわたっては問題となるところがないわけではない。例えば、ドイツ語の'mit dem Kopf nicken'が、執筆者によって「うなづく」「会釈する」「あごをしゃくる」「頭を軽く前にたおす」「会釈するまたはあごをしゃくる」など、異なった訳語で扱われており、不注意に読むと誤解を起こしかねない。言うまでもなく、これは'mit dem Kopf nicken'が日本語の「うなづく」などとぴったり対応していないことに起因する。この点についての説明は139頁で行われているが、身振りについての一般的記述のあたり(98~99頁)でほしかったと思う。

6.8 便宜的にここで触れると、誤植に類するものはほとんど気づかなかった。ただ、121頁の図3-12(5)の空白部は再版時に埋めていただきたい。

6.9 以上、第6章反省と今後の課題につき紹介をするとともに、私の意見を述べた。今後の課題としてもう一つだけ付け加えることが許されるならば、それは次の点である。

本書は日独言語行動の実態を記述し、そのうえに立って両者を比較しており、両者の特徴、異同をかなり明らかにすることに成功している。しかしながら、この特徴、異同は何にもとづくのかへの言及は必ずしも十分ではない。これは言語学だけの追求で解決する問題ではなく、学際的・総合的研究を必要とすることになるが、関連諸科学の協力を得てぜひ行われなければならない課題の一つであろう。

おわりに

『言語行動における日独比較』は、初めに述べたように、日独言語行動の比較対照を目的とする調査研究の成果で、日本でのこれに関わる研究では、最も大規模にして組織的・体系的に調査され、分析され、まとめられた、初めての収穫である。記述は総じて平易、かつ、丁寧で行き届いており、また、研究の反省・今後の課題等についても明示されていて、この分野の研究者は言うに及ばず、初学者にも極めて有用である。これは国立国語研究所のような組織と人材があっはじめて可能となる調査であり、まとめであるとも言えるが、それにもかかわらず、言語行動の調査研究を志す者にとっては、調査規模の広狭を問わず、また、調査主体が官か民かを問わず、本書から受ける恩恵は測り知れぬものがある。今後の研究は、それが国内の比較であれ、国際比較であれ、本書を参照し、本書を出発点とすべき重みと価値を有する。そして言語行動の国際比較が日本と世界諸国とのあいだに行われ、また、日本国内の比較が進む将来を待望するものである。なお、言語行動の国際比較研究の成果はその学問の狭い世界で閉じこめられ、温存されるべきではなく、国際化が叫ばれ、文化摩擦が叫ばれる今日、それは国際交流、日本語教育、外国語教育など多くの分野で広く活かされるべきであることも言うまでもない。

終りに、林大氏はじめこの調査研究にたずさわって来た関係各位の御努力に敬意を表するとともに、本書の出版刊行を心から喜びたい。

注1 日本でも地域によっては「ありがとう」の類を言う。以前、徳川宗賢氏が松本市に
来られたとき、私が店の人に「ありがとう」を言って別れるのを見て、氏はびっくり

(40) [書評] 『言語行動における日独比較』

し、東京ではそのようなことは言わないと言われたのを思い出す。

注2 サンパウロ大学で十数人の日系学生にこの点について尋ねたところ、ほとんどが「コレモライマス」「コレニキメマス」で、「コレヲ下サイ」型は1名もいなかった。母語のポルトガル語の表現形式の干渉によるものであろう。

注3 手の合わせ方は日本と他で異なる。日本ではてのひらを合わせて拝み、ドイツ及び在日外国人にあっては指を組んで拝むであろう。

〔後記〕本書の書評を学会より依頼されてから長い時間が経過した。これはひとえに筆者の怠慢と非才によるものであり、著者、学会員及び関係各位に衷心よりお詫び申しあげる。なお、国立国語研究所よりドイツ語版、英語版調査票をいただいた。御好意に感謝申しあげる。

(昭和59年3月発行 三省堂刊 A5判 386頁 8,000円)

——信州大学教授——

(昭和62年8月12日 受理)